

# モーツァルトの人生と創作の 意味

karinomaki

## はじめに

---

たくさんの作曲をして、35歳で生涯を終えた天才作曲家モーツァルトに思いをはせながら、人生の光と闇、そして創作の意味について書いてみたいと思います。

## モーツァルトの曲と人生の課題

---

モーツァルトは、オーストリアのザルツブルクに生まれ、主にウィーンで活躍した作曲家です。モーツァルトは、明るい長調の曲をたくさん作曲していますが、作曲をし続けた原動力は、どのようなものであったのでしょうか。そして、その作曲活動は、彼に何をもたらしたのでしょうか。

音楽に限らず、創作というものは、人生で与えられた課題を解くために行われると、私は考えています。人生の課題は、解くことが困難で、苦しみをともなうことが多いと思います。そして、創作が完成したとしても、その課題と向き合う苦しみは終わらないと思います。

もし、一つの課題を創作することによって解いて、与えられた課題が完全に解決しても、また次の課題が現れます。もしくは、もともと与えられている課題がとても大きくて、解いても解いても、解ききれないこともあります。作曲家という天才が、一生創作を続けるのは、そのためとされます。これと異なり、とても大きな困難を乗り越え、ハッピーエンドを迎える物語もたくさんあります。それは、観る人の心をととても幸せにしてくれます。私は、このことと同じような、幸せな気持ちをモーツァルトの曲からも感じます。でも、決してモーツァルトの曲はそれだけではないのです。美しい世界を表現し、幸せを表す・・・それだけではない、人生の深さを感じるから、私はモーツァルトの曲に感動するのだと思うのです。

## 枝

---

創作は、素晴らしいものを完成すれば、その満足や栄誉の上に乗れる、「折れない枝」（ハッピーエンド）ではないのです。一つ一つは、ある意味で、完成させてほっと一息つく枝かもしれませんが、それに乗っかってずっと安心してしていると、枝は折れてしまうかもしれません。その枝には、「人生」という「幹」があるのです。だから、人はどんどん創作を続けます。枝を一つ一つつくっていくうちに、幹はどんどん太くなり、もっと高い場所に枝をつくれるようになる。それこそが創作の喜びだと思うのです。

## 弱さをつつみこむ

---

自分は素晴らしいと思えず、自分のいたらなさを見つめ続けることの中に、本当の強さがあります。世の中に、本当に折れない枝（地位や名誉や、幸せ）があるのなら、それに乗ろうとするのは当然のことかもしれません。しかし、その枝に乗ったとたん、まだ乗れていない人の上に位置することになります。そして、もし、自分の下でもがいている人を見下してしまうと、その枝にのることは、素晴らしいことではなくなってしまいます。「自分は絶対安全なところにいる」と、安心しすぎることは、世の中に差別をつくってしまうのです。それは、強いことではありません。

それをなくすためには、自分の弱さ、いたらなさを知り、自分の傷をつつみこみ、それを原点として上昇しつづけることだと思います。自分のいたらなさを知っていることは、自然や神の偉大を知っていることです。そのことが、創作のスタートラインだと思うのです。決して人を差別しない人こそ、自分の上昇とまっすぐ向き合い続け、人と比べたりしません。優越感を感じたりしません。だからこそ、本当の意味で自分を高めていけます。その心が、創作の原動力となるのです。

「弱さをつつみこむ」スタートラインこそが、創作の美しい木の根元だと思います。

モーツァルトも人生でたくさんの挫折を経験しました。そのマイナスの経験を作曲に昇華していったからこそ、その創作力はアップしていったのだと思います。

## 人生に勝つとは？

---

今、「勝ち組」「負け組」という言葉がありますが、人生に勝つということは、素晴らしい人にしかできないのでしょうか。モーツァルトのような天才を、勝ち組というのでしょうか。モーツァルトの生涯を見てみると、その苦難の多さに驚きます。子供の頃、「神童」と言われ、早くから名声を得たモーツァルトですが、彼は作曲の勉強をしっかりと、努力を重ね続けました。モーツァルトはザルツブルクの大司教とそりがあわず、人に仕えるのをやめて、初めてのフリーターの音楽家になっています。ピアノを教えたり、演奏活動をしながら作曲をしていたのです。そして、晩年はモーツァルトの曲が、時代に受け入れられなくなり、借金を重ね、妻の病気の治療費を捻出しながら、自身も病気におかされながら作曲を続けたのです。

人生に勝つ・・・という意味を、モーツァルトの人生から考えると、地位や名声を手にするだけでもなく、また素晴らしい才能を持つことでもないと、私は思うのです。そして、幸せになることでもないかもしれません。モーツァルトは、どんなに苦しい状況にいても、作曲を続け、どんどん素晴らしさを増していきました。晩年にその作曲が世の中に受け入れられなくなったのも、モーツァルトが時代の波をはるかにこえたものをつくるようになったからと思われれます。どんな状況にいても、モーツァルトは努力を続けました。苦しみに打ち勝って、人生の課題を解き続けること・・・それが、本当に人生に勝っていることではないかと私は思うのです。

## 負けるが勝ち

---

もし、自分が誰かに負けている、自分の人生は誰かに比べておとっていると考えてしまうとき、その悲しみや劣等感こそが、自分が人生に勝つために必要なものと考えてはどうでしょうか。自分は人生に勝っていると思うよりもずっと強力な武器があるのです。それは、苦難を乗り越え続けられる強さをたくわえていくことです。幸せな人が味わえないような修羅場を経験し、自分の弱さを知り、自分は負けていると思い、劣等感でぐちゃぐちゃになってもいいのです。苦しい経験を積んでいくことは、何より強い精神をつくります。苦しみの課題を神様に与えられているということは、モーツァルトと同じように、その課題を解くことで、素晴らしい人生の創作、宝物が手にできるということなのです。それこそが、本当に人生に勝っていることではないでしょうか。心の傷は、宝物をつくる大切な源です。傷をいやして答えを見つけるとき、素晴らしい創作や、人生の宝物ができていくのです。

## モーツァルト

---

モーツァルトの曲は、圧倒的に明るい長調の曲が多いのですが、その奥底に、「ぼくは本当は悲しみも知っているよ。でも、明るく考えていきたいんだ。」という、無言のメッセージを、私は感じてしまうのです。だからこそ、私はモーツァルトの曲に、底知れない深さを感じます。

モーツァルトはたくさんの作曲をして、天にかえっていきました。この世界でたくさんの宝物をつくって……。その、人生の宝は、間違いなく、天国に持って帰れるものです。モーツァルトの作曲は、永遠だからです。永遠の宝物は、苦しくないと、手に入りません。それをつくるために、この世界に生まれたということを、モーツァルトは心から理解していたからこそ、苦しいこの世界を愛し、作曲を続けたのでしょう。私がモーツァルトの人生に思いをはせながら書いた詩を少しのせますので、どうか読んで下さい。

## 列車の窓

---

天国から地球への列車

今から、とても、心が痛む世界へと、降り立っていく・・・

でも、なぜかうきうきするんだ。

幸せな世界では手に入らない宝物がぼくを待っているから。

窓から見える景色も、だんだん濃く深い色に染まっていく

きっと、悲しみと友達になれる世界なんだ

この列車は、幸せと、悲しみを美しくつなぐもの

きっと、幸せをもっと美しくするために、地上には悲しみがあるんだね。

天と地をむすぶこの景色を忘れないでいたら、作曲家になれるかな

きっと忘れない

そして美しい涙の色を幸せな曲ににじませよう

## 生まれてきた意味

---

青い空、白い雲

美しい花々・・・

この地に生まれてきた意味を、表さなければ・・・

そんな使命をかんじていると、ぼくの頭の中に、なぜか天へのレールが見えた

神様が、生まれてきた意味を、ぼくに伝えてくれているのかな

生まれる前から、本当の幸せを、美しさを、心から知っている気がする

でも、何かが足りない。

美しさの奥に何か、もっと深いものが存在する・・・

ああ、それは涙だ。

うれしい涙も、悲しい涙も、どこかでつながっていて、世界でいちばん美しい・・・

そのことをたくさんの人に伝えるのがぼくの仕事なのだ

まだ子供だけど、自分の行く道をぼくは知っていた

## 作曲

---

神様、ぼくは曲を書きます

書くことで、悲しみと喜びが美しく溶け合い、生まれてきた意味がわかるのです。

苦しくてもいいのです。

苦しいからこそ、その心が解けるとき、こんなにも美しい。

ぼくは、聴く人の苦しみを解きほぐす曲がつくれているかな。

そう考えることができたとき、

子供のころからの夢が確かになんかっていることがわかったのです。

悲しくて苦しい。

だからこそ、生まれてきてよかった